
コードギアスR2.5 ~Reincarnation Story ~

えだゆき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

コードギアスR2・5 Reincarnation Story
Y

【Nコード】

N9383U

【作者名】

えだゆき

【あらすじ】

悪逆皇帝ルルーシュはゼロによって討たれた。そして輪廻転生後の世界はISが世界を駆け巡る世界。どうした事か記憶がある、体は大人、頭脳も大人。見知らぬ土地で第二の生を受けたルルーシュはこの世界でどうやって生きていくのだろうか。（Reincarnationとは輪廻転生の意味）

第零話 はじめに（前書き）

説明になります。

第零話 はじめに

・はじめに

この小説はコードギアス―反逆のルルーシュ―と、IS―インフィニットストラトス―の二次創作です。

本編を多少知っていないとよく分からない箇所があるかもしれませんが。作者自身も分かりやすいよう心がけますので生温かい目で見守っていただけると幸いです（本文優先ですが）。又、本編も私の感覚としてはおもしろい作品なので、もしよかったら視聴してみてください。

・作者について

作者は小説初挑戦の上、国語力は一般かそれ以下なのでその点はご承知ください。

ISに関しては現在アニメのみの知識となっております。半分行き当たりばつたりな企画なので、もしかしたらノベルを購入するかもしれない。又、悪ノリをして全く違う作品のネタ（あくまでネタ）を使用することがあるかもしれません。

ISの世界が基本になりますのでコードギアスからは殆どキャラクターは登場しないと思います。

・更新について

更新は不定期です。

・設定

簡単に言ってしまうと輪廻転生の法則から若干外れてしまったルルーシュがISの世界で生活していき・・・、という感じになります。「・・・」の部分は今の所秘密です。

オリジナルキャラクターは今現在出す予定はありません。設定を考えるのがたぶん駄目ですね。

・年齢制限について

ここに書かなくても良いのですが、一応です。

自分自身R15の感覚がよく分かっているないのでR15のタグは一応つけておこうと思います。

R18にはならないと思います。本編が基本になるので、本編で使われるシーンについてはR18で無いということにします（ラウラとかラウラとか、それからバーニーとか）。

・おわりに

ここで書いた設定、予想は物語の途中で改められるかもしれません。注意書きを長々と書いてしまいました。すみません。

では、二次創作、本編ともどもよろしくおねがいします。

第一話 魔王の行方（前書き）

ここから本編です。

第一話 魔王の行方

” 今日この日、世界は変わった。悪逆皇帝ルルーシュの死によって世界には平和が訪れたのだ。”

それがこの絵についている説明文だった。

—ここはCの世界。人々の記憶や心が集まる場所—

現世に別れを告げた後、Cの世界にやってきたルルーシュは退屈紛れに自分の過去を振り返っていた。

幾ら一時的とはいえ世界を手に残れた皇帝でも死後の世界など知る由もなく、漠然と暇をもてあましていたのである。

空間に浮かぶように設置されている額の中にはルルーシュの生涯が描かれており、その場に居もしない画家や写真屋がその一瞬だけを鮮明に切り抜いている。

「この絵をかつての参謀が見たら地団太を踏んで悔しがるだろうな。」

かつての戦友を思い出し、苦笑しながら先を見ると、もう一枚絵が飾られている。

「ナナリーに看取られながらの最期だとばかり思ったが・・・」

ルルーシュにナナリーの姿の後の記憶は無かった。

自分の最後が愛する妹の姿で終わったと思い、幸福と満足感を得て

いたルルーシュは小さく舌打ちをして最後の絵に向かう。

しかし、掛けられていた絵は・・・

「何も描かれていない？」

その絵はこれ以上ないほどの白で満たされていた。

「何故こんな絵が・・・」

「それはお前の未来だ」

「!？」

唐突に声を掛けられて振り向いた先に居たのは

「・・・俺？」

そこに立っていたのは見覚えのある学生服を着た自分自身だった。

「そのキャンバスは白いんじゃない、ただ何も塗られていないだけ。まだ未完成なんだ」

「何を言っている。俺はスザクに刺されて死んだはずだ！未来などっ！」

「そう、お前は死んだ。だから次の世界がお前をお呼びだ。」

「次の世界、だと？輪廻転生^{りんねてんせい}という事か・・・信じられんな。」

「信じようが信じまいが関係ない。それがこの世界の”理”^{ことわり}」それだけだ。」

「お前が言っている事が本当なら皇帝や母上も次の世界に旅立つた事になる。だが、過去に囚われた二人が未来に旅立つわけがない。」

「ああ、あの二人ならまだ自分たちの絵を眺めているよ。まだしばらく旅立つことはないだろう。」

「なら俺は・・・」

「お前は二人に比べて生きている時間が短かったからな。絵の数が少ないのは当たり前だ。」

「・・・」

「そして、全部見終わって暇をしているお前にはもうここに居る意味がないって事さ。」

奴がそう言っ指をさしたとたんキャンバスが光り始めた。

「くっ、何だこれは!!」

「心配ない。次の世界に向かうだけだ。」

「勝手な事を～～!! やめろ!! まだ、まだ俺は・・・」

「暇してるんだろ? 後、ついでに言っておくが今までの記憶は一度リセットされる。」

「・・・っ!!」

「いってらっしゃい。またいつか。」

「おいっ！待てっ!!」

光はルルーシュを包み、満面の笑みをしていた分身の顔は見えなくなつた。

呆然としながら俺は何処かへ落ちていく。

そして、突然自身を襲った衝撃によって俺の意識は途絶えた。

第一話 魔王の行方（後書き）

前回のタイトルで「零」を使いましたが、今回から普通に戻します。

第二話 拾い物（前書き）

時系列的にはまだISの本編ではありません。四月を入学として、それ以前のお話になります。

第二話 拾い物

満天の星、そして満月。

時折聞こえる船の汽笛。

地平線が見渡せる立地のホテル・・・といっても小屋のようなものだが。

教師、織斑千冬はシンガポールに居た。

「まったく、一夏の奴こんな気回しをせんでいいと言っているのに・・・」

怒りながらも顔が笑っているのだから仕方がない。

この海外旅行は中学生の弟が教師の目を盗んでやっていたバイトの給料で送られたプレゼントなのだ。

当然、最初はつつかえてやってやったのだが、何としても引き下がらなかったのと彼女自身が嬉しかったので今現在に至る。

偶にしか帰ってこない忙しい姉に少しでも体を休めて欲しいという弟からの配慮だった。

なにせこの前海外に出たのはドイツ軍に恩返しをするためだったし、休暇などではなかった。

海外で休暇を取るなど産まれて初めてかもしれない。

休暇などなくともそう簡単にこの体は悲鳴を上げないだろうが一人の姉として、家族として、弟の気遣いは嬉しいものであった。

「さて、少し泳ぎに行こうか・・・」

満天の星の下、水に浮かんでいるだけでもさぞ気持ちよからう。

そんなことを考えながら外に出た千冬だったが

「雨・・・か。」

さっきの晴天はどこへやら、空は黒い雲に覆われ小雨が降り、風も吹いてきた。

「仕方がない。ただの通り雨ならばしばらくしたら止むだろう。」

伝説といわれた千冬だが、自然を相手にしては白旗を揚げるしかなかった。

「所詮私も人間さ」

そう言つて小屋へと引き返した。

窓を打ち付ける雨、荒れる海、轟く雷鳴。しばらく経ったが一向に嵐が過ぎる気配はない。

「まったく、とんだ休暇になったものだ。」

当初の予定を完全にへし折られてしまった千冬は苦々しい顔で呟いた。

この調子では明日も期待できないかもしれないな、と思いつつ窓の外を眺めると砂浜に何か黒い塊が目に入った。

「ん？あれは……人か？」

かろうじて見える体の輪郭がそれを人だと物語る。しかし、あまりにも黒い。

正常な者ならこんな時間に海に入ることなどない。

ましてや今は嵐である。

それらのことを踏まえて千冬は外へと飛び出した。

このような時に砂浜に人が打ち揚げられるとすれば船が難破した可能性が高い。

密漁船の可能性もあるがどちらにせよ救助しないわけにもいくまい。

そう考えているうちに何時しか嵐は去り、激しく打ちつけていた雨も大分弱まっていた。

徐々に接近する千冬だが、倒れている人間に違和感を覚えていた。

人間的では無いライン、バランスの悪い身体……

「・・・・・・・・っ!!」

完全にそれを視界に入れた千冬は驚愕した。

千冬が見た黒い塊、確かにそれは人間だった。

しかし、ただの人間ではない。

拉げたスラスター・・・・のようなもの、ところどころ損傷した装甲。

そいつは千冬が見たこともないようなISを纏っていたのだ。

第二話 拾い物（後書き）

シンガポールを選んだ意味は特にありません。作者の勝手な判断です。よって、実際そんなもんねーよwという事態になるかもしれない。せんがお目こぼしください。

前回の第一話、ルビがおかしい事になっていました。後から編集つてできますかねえ・・・

第三話 魔王の目覚め（前）

キャンバスに飲み込まれ違う世界へと向かったルルーシュは過去の世界へ思いを馳せる。

大切な人、かけがえのない友人、もう小言も聞けなくなった共犯者。もうすぐ消える自身の記憶を惜しんで。

ああ、俺は生まれ変わるのか・・・。

記憶も体も失って、新しい固体となる・・・。

輪廻転生など信じてはいなかったが、こうなることが分かっていたればもう少しあの時間を過ごしていただろうに・・・。

ああ、ナナリー・・・元気にしているだろうか。

スザクはゼロを演じきれんだろうか・・・。

C・Cは世界を見届けてくれているだろうか・・・いや、大丈夫だろうあいつなら。そう思いたい。

こうしている間に少しでも世界は平和になっているのだろうか・・・。

まあ、死人が心配してどうこうなる問題でもないが。

そういえば先ほどまで体が痛かったのにもう治っているな。

次の俺は争いのない平和な世界に産まれたものだ……。

うつ、なんかまた痛みが増してきたな……。

痛い、頭が割れそうだ。

ん？だんだん明るくなってきた。次の世界が近いのか。

となると今の俺とはお別れだな……。

名残惜しいが……さらばだ、ルルーシュ・ヴィ・ブリタニア――

「ん？意識が戻ったか？」

しかしまだベッドの住人から返事は帰ってこない。

その代わりにさっきから寝言のようなものが聞こえてくる。

ここはシンガポールのとある小屋の中。

そして天気予定をぶち壊された上に遭難者にベッドを取られ、仕方が無いので暇つぶしに小説を読んでいる女性、いわずもがな織斑千冬である。

幾ら彼女といえど自然には勝てない上、遭難者を放置して置くほど無慈悲ではない。

天気やベッドの件は仕方があるまい。本当だったら病院に連絡するのだが未確認のIS、その上男がISを操縦していることが世間様に公表されたら寝耳に念仏なこの男が不憫であろう。

だから知っている者は減らさなければならぬと思いこのベッドに運んだわけだ。

しかし、しかしだ。

幸せそうに寝言を言い始めた当たりから幾ら寛容な千冬も腹が立ってきた。

その上断片的に聞こえる言葉が中二病の空気をかもし出している。

寝言は1時間近く続き・・・ついに千冬はキレた。

「いつまで寝とるかああああつつつ！！！！」

バシッ！と小説の背表紙がベッドの侵略者の額にクリティカルヒットした。

常人なら失神するレベルだが、ISを操縦できるものならどうにかなるだろうという半分投げやりな判断である。

侵略者の額が真っ赤に染まり、苦しそうに身をもだえて言った。

「ル、ルルーシュ・ヴィ・ブリタニア・・・」

「それがお前の名か？」

まだ半ギレ状態の千冬が問うと、侵略者は静かに目を開けた。

木材でできた天井、吊り下げられた電球、磯の香り。

そして、激しい頭痛。

これほどの頭痛は産まれて初めてだぞ。いや、生まれ変わったのだから当たり前か。

いや待て、記憶が……。

何故だ？生まれ変ったたら記憶が消えるのではなかったのか？

それとも最初のうちだけは記憶があるのか？

と、考えをめぐらせているといきなり視界に顔が入ってきた。

「気がついたようだな」

「ほあああつー!？」

仰天したルルーシュは痛みを忘れて飛び上がった。

記憶や体の事に頭がむいていて人がいるなど到底考えてもいなかった。

「黙れ。」

そして再臨した背表紙によりルル―シュの意識は飛んだ―

第三話 魔王の目覚め（前）（後書き）

あげなおしました、すみません。

ルルーシュは本当にこんな事を思っのか・・・若干不安ですね

第四話 魔王の目覚め（後）

木材でできた天井、釣り下がった照明。
日が昇り、比較的明るくなった室内。
ここに魔王は目を覚ます―。

「ここは・・・どこだ？何で俺は、こんなところに・・・？」

家具の少ない室内、海の近くのように潮の香りがここまで届く。

上体を起こし、周囲を確認する。

「記憶は、ある。体も五体満足にある。確かこの世界にいたあいつの話によると記憶も体も新しくなるはずだが・・・」

「やっと目を覚ましたか」

「！？」

声のした方を見ると一人の女が部屋へ入ってきた。

年齢は20代中盤ぐらいで黒髪。

しかし、その姿からは年齢にはにつかわしくないオーラが漂っていた。

とにかく、並の者ではない。

「そんなに警戒するな。私はお前をどうこうする気はない。」

「誰だ、お前は」

「命の恩人に向かって第一声がそれか？」

「悪いが今の俺に他人を信用する余裕はない。」

「フンツ・・・ならば先にお前が名乗れ、今自分のいる立場が分からないわけではないだろう？」

頭が痛い。一瞬意識が戻ったときこの女にやられたのだろう。

この俺が勝てるわけがない。

ギアスを使うか？いや、後先考えずにギアスを使うのは危険だ。

できるだけ情報を集めなければ・・・。

だが、ルルーシュ・ヴィ・ブリタニアが安全とは限らないか・・・。

「・・・アラン・スペイサー。父は公爵だ。」

何時だったか使った偽名を思い出す。

相手は俺の情報はない。ならば偽名でも十分通るはず・・・。

「ほう、ルルーシュ・ヴィ・ブリタニアではないのか？」

「なっ！！」

「図星のようだな。」

何故この女は俺の名前を知っている？

この世界でいきなり名前がばれているという事は・・・

未来？いや、それとも元の世界か・・・いずれにせよ悪逆皇帝の名は轟いているに違いない。

そんなルルーシュの考えをよそに女は続ける。

「私は織斑千冬。日本人だ。」

日本人・・・

「見たところお前はアジア系ではないな。どこの国の者だ？」

「フン、何を言っている？俺はブリタニア人。悪逆皇帝が他国の人間だとも思ったのか？」

「・・・ブリタニア？どこだそれは？」

「は？」

「私はブリタニアなどという国は知らないと言っている。」

「なっ・・・！！」

ブリタニアが存在しないだとか？あれだけの大帝国の名前を歴史から

消し去ることなどできるわけではない。

もしブリタニアが消えたとしても俺の名前だけが残っているなどという事はありません。

どうなっているんだっ！！

「そしてルルーシュ・ヴィ・ブリタニアなどという皇帝も私は知らない。」

「・・・」

「お前はいつたい何者だ？」

「俺は・・・」

どう説明しろというのだ。ありもしない国があつて、自分はそこからやって来た？ まともな人間じゃない。どうする？ 俺はどうすればいい・・・

沈黙。

頭をフル回転させる俺とその姿を冷たく見下すあの女。

答えなど、見つかるはずがない。

「お前は男、か？」

「は？」

唐突な質問に返答がつまる。
なんだ？いきなり何を聞いているんだこの女は。

「お前は男なのかと聞いている。」

女は顔をしかめて再度言った。
聞こえた事は間違っていないかったらしい。

「・・・男じゃなかったら俺はなんなんだ？」

「性転換手術を受けた事は？」

「ない」

「肝臓を患っている」

「いたって平常だ。そんなにお前は俺を女にしたいのか？」

「仕方がないだろう？ISを男が動かすなど初めての事例だ。」

「I、S？」

「女性にしか反応しないISが何故男であるお前に反応したのか・・・」

IS？なんなんだそれは？

「そしてあの損傷。あれだけのダメージを負うほど激しい戦闘がこ

の周辺であつたという報告は入っていない。あの嵐の中で何があつた？」

「嵐・・・そんな記憶は俺にはない。記憶にあるのはいきなり凄まじい衝撃を受け、一瞬目を覚ましたと思ったら誰かさんによって再び意識が飛んだ―それだけだ。」

俺の嫌味に女は顔をしかめた。

記憶についてはこの世界に着てからはこんなものだろう。本当にろくな事がない。

「まさかとは思うがそれ以前の事は覚えていない、という事か？」

「断片的な言葉しか覚えていない。」

女は訝しそうな目つきで俺を眺めた。

記憶喪失、なんて疑わないわけがない。

「ISについてはどうだ？」

「残念だが。覚えているのは氏名、年齢、後はつながりのない単語だけだ。」

「それを信じると？」

「別に信じなくてもいい。助けがなくても世渡りできるぐらいの力はある。」

ギアスという力がな。

「ISを使える男、それ以上の強力な情報もないと思うが？」

「それは有力な情報にはなりえない。もしISを男が使えないとしたらそれだけで周りが騒がしくなる。そんな事に費やす時間は俺にはないしリスクが大きすぎる。」

「時間がない、という事か？」

「記憶を取り戻すなら急いだ方がいいだろう。自分を知らない自分が一番恐ろしい。」

「メディアも駄目だという事か。」

「ああ、誰が俺を見ているか分からないからな。」

この記憶喪失のふりも何時まで続くか分からない。

しかし、この世界で起きた事については本当の事を言っている以上嘘が露見する事はあるまい。

それに、まだ俺も完全に元の世界とつながりがないと断言したわけではない。だからこそ慎重に動く必要がある。

「お前はこれからどうするつもりだ？ここはわたしの家ではないからな。数日中に立ち去る事になる。」

「しばらくは世界を見て回るつもりだ。」

「当てもなく彷徨うのか？それこそ非効率だと私は思うがな。」

「場所は絞ってある。数箇所を回るだけで済むはずだ。」

「手がかりがなかった場合、お前はどつする？」

「その時はその時だ。自分の死に場所ぐらいは自分で決める。」

「そうか……。もし気が向いたらここに来い。一定期間は保護してやれる。」

そう言つて彼女は名刺を差し出した。

「IS学園？お前は教師だったのか？」

「ああ。IS専用の学校、それ故女子しかないがな。」

「おい……。」

「研究機関等の紹介もできる。世界にたった一人の男のISユーザ——ともなればしばらくは生活には困らないはずだ。」

一言にすればモルモットか。そんな気は全くないがな。

「……わかった。考えておく。」

そう言つて俺は枕に頭を預けた。

「そついえば、何故俺の名前が分かつたんだ？」

悪逆皇帝もいない、ブリタニアもない、そんな世界で俺の名前だけが存在するはずがない。皇帝がいなければ俺はいない。しかし、ブ

リタニアはない。俺の名前はいつたどこから知れ渡ったんだ？
その問いに彼女はニヤニヤしながら答えた。

「ああ、あれか。確かに自分を知らない自分が一番怖いな。」

そう言って笑いながら部屋の外へ出て行った。

第四話 魔王の目覚め（後）（後書き）

コメントの方に若干短いのでは？とのご意見をいただいたので少し長めになりました。言葉遣いが各キャラクターによって違うので大変ですね。私の貧相な頭ではルルーシュが考える事と同じ事なんて考えられませんよ。無理やりな部分が見受けられますがご容赦ください。

第五話 新たな力

夜の海。

潮のざわめき。

足裏の砂の感触。

そして、頭上に広がる宇宙

うみ

。

元の世界と寸分変わらぬ星達。

その姿に思わず懐かしさを覚えるのは俺が新しい世界で見つけた”元の世界”だったからかもしれない――。

小さめのかばんに荷物を詰める。大体が申し訳ないぐらいの量しかないので比較的小さなかばんでも簡単におさまってしまう。

「もう行くのか。」

物音を聞きつけて織斑がやってきていた。

「ああ。短い間だが世話になった。」

浜に打ち揚げられてから・・・この世界にきてから4日目の朝。

俺はこの場所に別れを告げることにした。

とはいえ、何の思い入れもないただの安っぽい掘っ立て小屋だが。

当座の金は織斑からもらっていた。最初は断ったのだが金の宛を聞かれるといささか耳が痛い。

もう二度と姿を見せることがないかもしれない事を考えると多少は気が引ける。

だからといってギアスを自重する気はさらさらないが。

「はぁ……。ここから北へ進めば空港だ。殆ど一本道だから間違える事もないだろう。しかし……。本当に良いのか？まだ私は数日ここにいるが……。」

「体の方は問題ない。問題はこっちだ。」

そう言ってまったく問題なしの頭を指す。

「確かにそうだが……。まあ止めても無駄か。とりあえず一段落ついたら必ず私を訪ねて来い。流石に旅先の知り合いががその先でのたれ死んでいたら夢見が悪い。」

ついでに空港までの手配の話も断ってしまった。少しでも懐の余裕は欲しいし、なによりこの世界を見て回りたい、という気持ちが強かった。

「わかった必ず寄る。じゃあ俺はこれで。」

「ああ。気をつけてな。」

そう言って織斑と別れた。

再び会うことなどあるのだろうか？そんな事を考えながら歩を進める。

通り過ぎる車。

サイドカー付きのバイクが隣を通ったとき元の世界の友人の事を思い出した。

学生時代に共に危ない橋を渡った悪友。

今となつては良き思い出である。

湾岸線に沿つてつくられた道はゆっくりとカーブしており、この世界で初めての看板が目に入った。

『↑空港40?』

「なん・・・だと・・・?」

決して歩いて行く事ができない距離ではない。しかし・・・しかしだ。

生まれ変わつても感觸の変わらないこの体。運動音痴だけが改善するなんて都合の良い事があるはずもない。

「40?は流石にきつい。やはり手配をしてもらつべきだった・・・。車を捕まえるしかないか。」

もし断られそうでもギアスを使えば何とかなる。

そう思いながら目を光らせる。

しかし、先ほどまで数台は隣を通り過ぎていた車が今は一台もいなかった。

「くそっ!こんなときにナイトメアフレームKMFがあれば・・・。ガウエインや蜃気楼さえあれば一瞬なのに。この際グラスゴーだろうがサザーランドだろうがなんでもいい。俺に寄越せ!」

そう一人で叫んでいると目に異変が起こった。

「くっ、目が・・・こんな時に。いや、この感じどこかで・・・。
そうだ！ユフィの」

そう言った途端ギアスの発動と共に光が目から溢れた。

「な、なんだこれは！！」

慌ててギアスを停止したが光は止まない。

苦し紛れに走り出しても光は付きまとい続ける。

光は増え続けルルーシュの体を包み込むと、ついにはルルーシュごと消えてしまった。

その光景を遠くからなんとなく見ていた人物がいた。

「・・・消えた、だと？」

幾ら科学が発展したと言っても一瞬で姿を消すことなどたやすい事ではない・・・。

「IS、か・・・。」

そう呟くと景色の中に姿を消した。

「っ……ここは？」

ルルーシュが倒れていたのは森の中。もちろんこんな場所に来た覚えはない。

「確か、ギアスが暴走して……。」

そう言いながら体を起こすと体に妙な違和感がある。

「なんだ……これは？」

ルルーシュの目に入ったもの、それは胸部を覆うアーマー、箆手、そして足部にはランドスピナー。その殆どの部分が黒く塗られており、この容姿には見覚えがあった。

「グラスゴー……なのか？しかし、何故こんな物が……。」

一瞬で人を気絶させることはたやすい。そしてその間にこのような姿にされてもおかしくはない。

しかし、事の初めはギアスの暴走である。逆にそれ以外に疑う余地はない。

「俺が、ギアスが呼び出したのか？しかし、どうやって操作するんだこれ？」

ナイトメアフレーム

KMFなら操縦経験はある。しかし、自身に張り付いては操縦のしようがない。

そして、何より重い。

「くっ・・・これでは逆効果じゃないか！何か、何かないのか？」

スイッチはない、操縦桿そうじゅうかんもない。どうにもしようがない。

そつえば、ギアスを使った事でこれが現れた。ということは・・・物質にギアスは通用するのか？という疑問もあつたが大体がギアスの産物。ギアスが効かない事もあるまい。

「ルルーシュ・ヴィ・ブリタニアが命ずる。グラスゴーよ、我に従え！！」

すると、各機関に命令が伝達し始め、今まで鉛のように重かった体が軽くなった。

「よし、いいぞ。後は操作さえ慣れれば・・・40キロも夢じゃない！！」

歩行、旋回の練習にそれなりの時間を使ってしまった。

調べているうちにギアスが発動しているときだけ作動する事も分かった。

そしてどれくらい時間が経つたのかと太陽を探すと、日は傾き、西の空に輝いている。

「まずいな。早いところ空港に向かわないと。その前にここはどこだ？」

少しあるいてみるとすぐ道路が見えた。

おそらく走り回ったときに偶然近くにあつた森の中に入ってしまったのだらう。

まあ、こんな異様な姿を晒すわけにはいかないから結果、怪我の功

名だったともいえる。

そう思いつつ道路に出ようとしたが、重大な事を思い出した。

「この姿では公道は走れない・・・。」

半日が無駄になったルルーシュはゲンナリとした顔で今にも海岸線に落ちそうな太陽を睨みつけた。

第五話 新たな力（後書き）

第五話です。織斑先生との絡みが少ないですね。一度書いたのですが相当短くなってしまったので番外編でも作ろうかと思っています。

第六話 黒の王へキング

いつもと変わらない世界。

ごくありふれた日常。

一見変わらないように見えるそれも刻一刻と変化している。

永久不変、そんな言葉はこの世には存在しない。

しかし、もしも永久不変の何かがあるのなら人はどうする？

異端と唱えるか、安心だと言い切るか。

きっと人は後者だと言っだろう。

だって、人は変わりたくないものだから――

あの後運良く道を通りかかったタクシーを捕まえることができた。
車内の時計を見るともう7時前。

「お客さん、どちらまで？」

「空港まで。あと、洛陽まで行きたいのだが飛行機はまだあるかな？」

「洛陽ってことは中国ですか。少々お待ちを」

そう言っって運転手は通信機で確認をとりはじめる。

そっつか、こちらの世界では中華連邦ではないのか……。

それにしても、言語は殆どが共通しているな。それに時計まで殆ど変わらない。

いったいこの世界はどんな世界なんだ？

「分かりましたよ。洛陽への便は11時の便が一つだけです」

「空港までどれくらいかかりますか？」

「そうですねえ、20分もあればつきますよ」

そう言つて車を発進させる。

20分という事は約3時間の猶予ができるのか……。

「学生さんですか。こちらへは観光で？」

「ええ、まあ」

「シンガポールはいかがでした？」

「海が綺麗でしたよ。それはもう、何度も気絶するぐらいね」

「ははは。そんなにですか？シンガポールは観光スポットが多いですからね。あの程度で倒れてしまわれたら身が持ちません」

「そうですね。僕は海しかみていませんが」

「そりゃあ勿体無いですねえ。空港の近くといたら……ショッピングモールぐらいしかありませんよ」

ショッピングモールか……お誂え向きだな。少し荷物を整えようと思つていたところだ。

「後はカジノが近くにあるらしいですけど学生さんですし危険ですから行つてはいけませんよ」

カジノ……か。

フフフ、これはいい資金稼ぎになるかもしれないな。

運転手との話を続ける事約20分。
タクシーは無事空港に到着した。

存外よくしゃべる男で、今の世界情勢やらどこぞの企業の業績やら一般の観光客なら迷惑以外の何物でもないような話をべらべらと20分続けた。

しかし、そのおかげで大きな収穫を得ることができたのは確かだ。

「ははは、私の話をこんなによく聞いてくれた人は久しぶりですよ」
その台詞と道中で頼んでおいた地図を残してタクシーは去って行った。

見たことのない建造物が立ち並ぶ街。

地図によると今立っている場所が空港のエントランス、道路を渡って向こう側にショッピングモールと記してある。

「まずは・・・買い物だな」

規模は元の世界にあったショッピングモールと同じくらい。

周囲にも多くの店が混在しており、食品、衣服、電器・・・少し奥に入るとジャンク屋から怪しい雰囲気醸し出している店まであった。

「ん？これは・・・」

ジャンク街で見つけた一つの仮面。

かつて自身が身につけ、今でも友が身に着けているであろう仮面ではなかったが、とても似ており郷愁きょうしゅうを覚えるには十分だった。

「いらっしやい。この仮面、気に入ったかい？」

郷愁に浸りすぎたのだろう。店主に声を掛けられてしまった。

「い、いや。別にそんなわけでは」

「コスプレか？それとも仮面舞踏会？今なら衣装もつけるぜ？」

そう言つて店主は店から衣装を持ち出してきた。

「だから、そうではないと・・・」

その時ルルーシュはある事を閃いた。

「この仮面はお前のオリジナルか？」

「いや、これはレプリカだ。本物はもうこの世にはないんじゃないか？いい加減昔のものだしな。」

「大量生産はされているのか？」

「まあな。探せば見つかるだろうが・・・この店が一番安い自信はあるぜ？」

「在庫はまだあるのか？」

「ああ、まだ4つぐらいあるが・・・」

それならば全ての条件はクリア。

多少お遊びが入っているがこれはこれでいいだろう。

「んで？買うんかい、買わないんかい？流石にこれだけ喋らせて買わないってこたあねえよなあ？」

「ああ、買わせてもらう。但し、条件がある。」

「あん？」

金を出してギアスを開放する。

この世界で最初のギアス被害者だよ、誇って良いぞ店主。

「今あつた事を全て忘れろ!!」

「・・・わかった。」

そうしてジャンク街をあとにした。

公の場にあるカジノ。

身体検査、持ち物検査が置かれ、物々しい警備体制がしかれている。ここ、シンガポールのカジノはマフィアがない安心して金を預けれる事が知られているが、実際問題全員が善良であるかといえ否である。

そこに異質な人間が入り込んだ。

顔を覆う仮面、真つ黒な衣装とマント。

明らかに怪しいでたちのそれは人ごみにまぎれるように店内へと姿を消した。

「ははは、今日は調子がいい。今の所12連勝だ!」

そう叫んでいる男の前に詰まれたコインの山。

そして盤上に転がっている黒の王。^{キング}

彼らの回りは大勢のギャラリーで埋め尽くされ、歓声が上がっている。

「さあさあ!次はどうだ?今の俺は機嫌がいい。どんな賭けでも乗ってやるぜ?・・・と、言っても?今の俺様が相手じゃあ誰も勝てないだろうがな!!はっはっは!!」

「ほう、そうですか。それなら私がお相手いたしましょう。」

誰も乗るはずがない、そう思っていた男はぎょつとして振り向いた。全員がその声の方を向いた先にその人物はいた。

全身黒で統一された衣装。そして、仮面。

何時からいたか分からないがなんにせよ胡散臭いことこの上ない。

「おいおい、今度の相手は顔も見せられない臆病者か？悪いが俺はフェアじゃない戦いはしないことにしてるんだ。」

「先ほど”どんな賭けでも”といましたよね？」

「それでも、だ。フェアじゃない戦いまでは望んでねーよ」

「そうですか……。ならばこうしましょう」

そう言つて仮面は隣にあるタイマーを弄る。

「ほお、ハンディかい。まだ足りねえねあ」

そう言つて男はルークを二つ投げ捨てる。

「これで対等だ」

「いいだろう」

「・・・掛け金は？」

仮面は隣のコインの山を黙つて指差す。

「おいおい、これ全部か？」

「・・・」

「フン、後で吠え面かくなよー!!」

そうして男にとっての13回目の戦いが始まった――

現在時刻10時47分

11時発の飛行機にルルーシュはいた。

「さて、これですばらくは多少は無茶をしても平気か。織斑に借りた金の数倍が手に入ったからな」

そう言って通帳を眺める。

あの後、追ってくる野次馬その他を撒いて買い物を済ませた。流石に衣服が一着では心もとない。

違う世界の品物にも興味があつたがそれほど変わらず失念。

時間つぶしと資金稼ぎのための賭けチエスだったがとても時間つぶしにはならなかった。

便利な事でパスポートも裏の街で偽造することもできた。

まあそれなりにぼられたがそれ位は仕方があるまい。

「さて、洛陽か……。到着は16時間後。丁度昼ごろだな」

天子たちは運転手の話だと存在していない。

天子制はずっと前に潰^{つぶ}えていた。

今回の旅だがもちろん観光目的ではない。

ルルーシュの中のある仮説を確かめるため、そしてこの世界で自分が落ち着く場所を探すための世界半周旅行だ。

「もし俺の考えが正しければ……。おそらく」

そうしてルル―シュを乗せた飛行機は夜の空へと飛び去っていった。

第六話 黒の王へキング（後書き）

こんにちは、こんばんはえだゆきです。

若干最後の詰が甘かったかもしれないね。

前回ルビの不備が見つかりました。すみません。

今回からはやっと対策がとれそうなので多分ミスはなくなるかな、と思います。

シンガポールにカジノがあるのをはじめて知りました。

それに洛陽行きの飛行機なんてあるんですね。西安から移動するとはっかり思っていました。

後、投稿間隔が徐々に開いてきていますが最終的には一週間ぐらいで落ち着くと思います。とはいえあくまで不定期なので断言はできませんが。

では。

第七話 異界を往く

ああ、また来てしまったよ。

もう来ないってこの前約束したのにな。

お前はもういないってわかっているのにな。

何故だろうな？

まだお前がここにいて、いつか交わした約束を叶えてくれるんじゃないかと期待してしまう私がいるんだ。

ああ、愚かだな。

死んだ人間にまで契約を、約束を果せという私は。

そっだろっ？ ルルーシュ――

「・・・ない、か」

ここは洛陽。元の世界で言えば中華連邦が首都、朱禁城の辺りである。

しかし、あるはずの朱禁城しゅきんじょうはなく、商店街が広がっており元の世界と同じ姿は見受けられない。

あるとすれば道路の伸び方が大体同じというぐらいか。

「まあ地図にも本にもそんな場所は存在しないのだから無駄足になると思っただけだな」

朱禁城らしきものも存在しないこともないのだがそれは紫禁城しきんじょうと名前を変え、北京に建築されている。

そして、天子たちもまた存在しない。

皇族制は戦乱の中で消滅していたからだ。

調べるだけならこの世界にもネットがあるのでそれを使えばいい話なのだが、ギアス遺跡や中華連邦にあったギアス嚮団など元の世界で極秘裏に扱われていたものについては自分で調べるしかなかった。まあ、ギアス嚮団の周辺は一面砂漠で何も発見することができなかったわけだが。

「情報はなかったが収穫はあった。だが確かな確証がない・・・次はブリタニアだな」

空港への道の途中で漂う香ばしい匂い。

それにしてもこの辺りはおかしな食料品店が多い。

何故食堂の前に蛇などが檻に入って置いてあるのか・・・。

メニューを見れば食材となっている事が分かる。

「これ・・・食べるのか？」

昔、ブリタニアの街を見る度に

「あんなおぞましい色をしたケーキをよく平気で食べれるな」

と、玉城たちが言っていたが、きっとこんな感じなのだろう。

そんな事を考えながら空港近辺までくると電気量販店のテレビがISの報道をしていた。

”中国の代表候補生、凰 鈴音”と出ている。

IS・・・俺が知らないうちに操れるようになっていた力、か。今後のためにも無視するわけにはいかないだろう。もう少し調べる必要があるか・・・

「凰 鈴音はIS学園へ転校する事になっており、ついては・・・」

「・・・IS学園？」

IS学園といえば織斑が言っていた女生徒しかいないIS専用の教育機関・・・。

無視するつもりだったが、これは寄る用事ができたかもしれないな。

ルルーシュを人込みの中から観察している人物がいた。

「ISどこるかギアスまで使える男だとはな・・・」

道端でルルーシュのISを目撃した後ここまでつけてきたのだ。

「もう一人のコード保持者、その存在を確かめなくてはな」

そう言ってまた人込みにまぎれた。

アメリカ合衆国。

調べ物が終わったルルーシュは近くのカフェで情報の整理をしていた。

国自体が違うのだから首都ペンドラゴンなどあるはずもなく、皇帝すらない。

史実が食い違ってくるのが18世紀後半、ワシントンの乱（アメリカ独立戦争）辺りからか。

こちらでは独立戦争が成功している。その上、初代皇帝が皇帝として存在していない。

貴族たちは残っただろう。だが、環境が変われば運命も変わる。あいつらがこの世に生を受けている可能性は限りなく低い……。よって俺の産まれていない世界という事になる。

そして今までの事から導き出せる答え、それはこの世界がパラレルワールドだという事だ。

「まさかこんな非常識な事があるとはな。まあそのまま生まれ変わった俺の方が世の理としてはイレギュラーだろうが」

人生において決定・決断は星の数ほど存在する。

その中にはその場の気分、自分の気持ちで決定されるものも数多い。もしあの時違う選択をしていたら・・・という世界がパラレルワールドだ。

小さな食い違いも積み重なり大きな違いへと変わる。

それこそ今回のように一国の運命さえ変えてしまう。

そんな世界に放り込まれた俺は一種のタイムトラベラーで、世界にとってイレギュラーな存在。

まあこの時間軸のずれた世界で未来も過去もないが。

「この世界で俺との接点がある人間がいる可能性は限りなく低いということだな。後残るは・・・ギアス遺跡か」

この世界にギアス嚮団は存在しないのだろう。

なぜなら創立者であるシャルルとV・Vがいないからだ。

しかし、それがギアスそのものを否定する材料にはならない。

ギアス遺跡自体は大昔につくられたもので、存在している可能性は十分にある。

「日本へは遺跡の調査とIS学園か・・・まあいい、その前にやるべき事は・・・」

どこからか感じる視線。

昔、隠れながら生活していた名残でやけに研ぎ澄まされてしまった感覚が尾行者がいる事を感じ取っていた。

「まさかとは思うが・・・ギアスを見られたか？いや、あれは見て判断がつくものじゃない。とすると・・・ISか？」

織斑の話によるとISを男性が動かすことはありえないそうだ。

それを動かしたのだからいくらでも話の種になる。

しかし、報道とは反応が違う。

警察か、もしくは諜報部のような機関か・・・。

とにかく、追っ手を撒くことが最優先だ。

立ち上がり、店を出ると少しして店のドアが閉まる音が聞こえてきた。

尾行を撒くのは手馴れている。
後は素性を確認すれば・・・

そう思つて近くい止まっている車のバックミラーをちらりと見た。

「なっ！！」

ミラーに映つたその姿を目にしたとき、俺の目は見開かれ、体は硬直した。

何故、何故あいつがここにいる！？

あまりの驚愕に立ち尽くしているとミラー越しに見られた事が分かつた尾行者はきびすをかえして逃げ出した。

「くっ、おい！待て！！」

慌てて追いかけたが差は広まるばかり。

このまま人込みに逃げられたら終わりだ。

絶対に逃がすわけにはいかない。

しかし、体力勝負では負けるのがみえている。

どうすればいい、俺はどうすればいいんだ？

そして導き出した結論、それは

「ええい、ままよ！」

思考の放棄だった。

「こい、グラスゴー！」

ISを展開する。

何故か宙に浮いている気がするが関係ない。

俺はそのまま尾行者に突っ込んだ。

第七話 異界を往く（後書き）

お久しぶりです、えだゆきです。

大分お待たせしました。

約一週間、はやいものですね。

今回は・・・無理やりなことになってしまいました。

世界設定という感じでしょうか。

このままでは分かり辛いのでいつか番外編のような形で世界設定、メカニックを紹介したいと思っています。

第八話 再会の使徒

自分の好奇心をこれほどまでに呪った事はない。
興味本位で尾行なんてするもんじゃなかった。

おかげで現在全力逃走中である。

「何を考えているんだあいつは!!」

引き離したと思っていた。

タイプの運動音痴だと甘く見ていた結果がこれだ。

「街中でISを起動させるだと? 正気の沙汰じゃない!」

生身の人間にISを持ち出すとは見た目と違って大人気ない奴だ!

「ちょっとこれ、借りる!」

そう言っただけで路肩に停車していたバイクを強奪した。

だって仕方がないだろう?

それに、こんな美人を助けるためだと思えばきつと持ち主も鼻が高い。

きつと今夜は枕を高くして寝る事ができるはずだ……。

それにしてもしつこい。

さっきから路地を何本かくぐってきたが一向に撒ける気配はない。
警察は何をしているんだ!

そう思っていると川沿いの大通りが見えてきた。
あの中に紛れ込めば無闇に手出しはできまい。

「じゃあな、童貞坊や」

そう呟いた時だった。

「
！！」

懐かしい響き。

二度と呼ばれまいと心の中にしまいこんだ名前。
今まで多くの人間にギアスを与えてきた。
しかし、何人たりともその名前を教えた事はない。
それを、何故、あいつが知っている！？

「S t o p ! ! S t o p ! !」

その声で我に返った私が見た光景は淀んだ水面に徐々に近づく自分の姿だった。

「山田先生、アメリカで正体不明のI S が目撃されたというのは本当か？」

「ええ。民間人を拉致して逃走したとの事です。」

「所属不明のISか。」

「それと、ISを操縦していたのが男性だという証言があるそうです。」

「・・・何？」

「ISは女性しか動かすことはできませんからきつと見間違いだと思いますよ。ボーイッシュな女性もいるわけですし。」

「・・・・・・・・」

「どうかしましたか？織斑先生。」

「（まさか・・・。まさかな。）」

とりあえず警察は撒いたか・・・

とある廃ビル。

ルルーシュは割れた窓から外の様子を伺っていた。

大通りをパトカーと競り合うなんて元の世界でもなかったぞ！

血の気の多い人間がパトカーに乗っていたようで歩道から、ビルの隙間、下水道の中まで追ってきた。

何か振り回しながら騒いでいたが・・・あれはなんだったんだろうな。

コツコツと後ろの方から足音が近づいてきたため若干緊張したルルーシユはその姿を見つけて安堵した。

「C・C・・・」

前の世界で俺にギアスを与え、死を願った魔女。

そしておそらく俺が一番信頼している共犯者、いやその表現は正しくないか。

「追っ手は撒けたのか？」

久しぶりの再会に内心歓喜していたが今はそんな余裕はない。

「ああ、なんとかな。相手はこちらを見失っている。ローラーをかけるにせよしばらくは見つけられないはずだ。」

確証はなかった。

元の世界と技術の発展の方向が違っている故に聞いた事もないような捜査法がいきなり飛び出してきてもそれはどうしようもない。

しかし、逃げ続けても捕まる保証がないわけではないのでこの世界が諜報に特化していない事を祈るしかない。

「そうか。じゃあ時間はあるんだな？」

「あたりまえだ。何のために俺があそこまでしたと思っているんだ？」

「私は女だからな。男の考える事など分からないさ。ただ分かるのはこの後お前が何をするか、それだけだ。」

「ならば聞かせてもらおうか。俺がこれから何をするのか。」

俺がこれから何をするか、そんなものは決まっていなかったから正直驚いた。しかし、こいつとは長い付き合いだから普段の俺が考えるような事を察してくれたのだろう。若干冷静でない俺よりは普段の俺を基準に意見してくれるこいつに従ったほうが良いはずだ。はず・・・だったのだが。

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

「・・・プイツ」

「何故目をそらす？」

「こついう事を真顔で問うお前もどうかと思っただがな。」

「はぁ？」

意味が分からない、そんな顔をするところの黄金色の瞳が獰猛な光をおびた。

「つ・・・本当にお前は今から私を抱こつとしている自覚はあるのか！？」

「なっ！！」

予想もしなかった言葉にルルーシュは言葉を失った。

「・・・ちょ、ちょっと待て。いつ俺がそんな事を考えた？」

「フン、こんな所につれてきておいてよく言う。」

そうして指をさした先。

向かいのビルに写ったこの廃ビルの看板を見てルルーシュは愕然とした。

『ホテル 愛の城』

「何も見ていないとでも思ったか。この童貞坊や？それに私は赤の他人のお前と交わる気はさらさらない！」

「っ、黙れ魔j（ry・・・待て、今なんて言った？」

聞き間違いか？赤の他人って今・・・

「そんなに連呼されるのが嬉しいか。この童貞がつ！」

「違うつ！お前、赤の他人と言ったのか？」

「当たり前だ。私の中にお前の記憶など存在していない。」

今までいくつもの資料をこちらの世界で眺めてきた。同じ人間に出会えるわけが無いと結論付けて、C.Cも自分と同じようにこちらの世界に飛ばされてきたのだろうと勝手に思い込んでいた。しかし、どうもそうでは無いらしい。となると考えを根本から見直す必要が

ある。自身の存在さえも――

「・・・聞きたい事がある。お前はシャルルとマリアンヌという名前を知っているか？」

「なんだ？藪から棒に。」

「・・・答えろ」

先ほどと空気が一変したためか、答えるまで動かないというこちらの意思を察したのか、Cはしぶしぶと答えた。

「ああ、知っている、よく知っている。もっとも、もうこの世にはいないがな。」

「・・・二人には子供がいたろう？」

「ああいた。ルルーシュだったかな。」

「一人だったのか？」

「そうだ。」

どうやらオリジナルが存在しているのはC・Cだけではないらしい。そして、こちらの世界にはナナリーはいない・・・。

平行世界なのだから仕方が無いとは思いつつも多少心が痛んだ。

「ルルーシュ・・・そいつは今どこにいる？」

「分からない。」

「何故だ？お前はあいつらとは親しかったのだろう？」

いい加減にしろ、C・Cはそんな顔をして言った。

「何故そんなにシャルルたちの事が気になる？地方の低級貴族の事を調べてどうするつもりだ？」

「・・・」

「お前は何者だ？報道の人間か？それとも何処かの研究機関か？」

「俺は・・・」

この世界に存在しないはずの俺。
名前など無いに等しいわけだが、こいつの前ではルルーシュでありたい、そう思った。

「俺が、ルルーシュ・ヴィ・ブリタニアだ」

そう言った途端C・Cの目が大きく開かれた。

「お前・・・が？あのルルーシュなのか？」

「証明はできない。信じて欲しい、それだけしか言えない。」

「馬鹿な・・・生きていた？しかし、それならギアスの件も納得がいく。」

「どういう意味だ？」

「私が知っている限りではお前は13年前から行方不明。普通だったら生きている可能性などつくに捨てている頃だ。」

「行方不明・・・」

なんという事だ。

平行世界の俺はもう死んでいるだど？

生きている方からすればオリジナルが死んだ事で動きやすくなったわけだが、やはり死んだとなると良い気はしない。

「そしてそのギアスはお前が小さい時に私が餞別としてくれてやった物だ。」

俺が小さい時に渡されたギアス？

マリアンヌやシャルルたちと引き離されて俺は何をやっていたんだ？
判断材料の海におぼれかけていた俺を見てC・Cは言った。

「お前は何故自分が今までのような運命をたどったか知らないのだから？」

「俺の・・・過去？」

「ああ。お前が覚えていない、今までの不幸の原因だ。」

そう言ってC・Cは話し始めた。

「お前の親は英国の低級貴族だった。大昔には女王に仕えるほどの貴族だったらしいが時代の流れの中でゆっくりと衰退した。そんな中、シャルルは庶民階級のマリアンヌと浮気をした。貴族と庶民の

差は激しい時代だったからな。周りが許さなかったよ。二人は処刑され、お前は夕子の悪い連中に売り渡された。その後の事は私も分からない。ただ船で連れて行かれた時、もう生きて会うことは叶わないと思ったのだから。」

もちろん俺はこちらのルルーシュの過去など知らない。

しかし、こちらの俺は元の世界の俺よりも過酷な環境にいたらしい。その上原因はまたシャルル達ときたものだ。

どこの世界でも俺はあいつらに崇られているのではないかと思う。

「ルルーシュ、お前はこの13年の間何を見て、何をしてきた？今のお前は私から見れば奴隷として働いてきたような人間には見えない。貴族家庭、いやそれ以上の「もういいっ！」っ……。」

俺はC.C.の言葉を遮った。自分の奴隷人生の事など想像したく無かったし、半分赤の他人のような人間に俺の昔の事を詮索されたくなかったからだ。こちら側の事など知ったことが。俺は俺だ。

「俺は海に捨てられておせっかいな女に助けられた。その前の事は知らん。」

「……そうか」

かなり強引に話にけりをつけてしまったが嘘ではない。実際これ以上話せることなどないのだ。

「なあルルーシュ、一つ聞いてもいいか？」

「なんだ？」

先ほどの事で眉間にしわを寄せていたがそんな事は意に介さないようにＣ・Ｃは言った。

「どうしてお前は私の本当の名前を知っているんだ？」

追いかけている時に思わず言ってしまったんだな、と思い出して

「クツクツ・・・さあ？なんでだろうな。お前が寝言でも漏らしたんじゃないか？」

「ずいぶん生意気に育ったものだな、ルルーシュ。」

「悪いな。世話焼きと生意気はデフォルトなんだ。」

なんだそれは？と首をかしげるＣ・Ｃを尻目にして外の様子見に行くとかかなり遠くの方で赤いランプが点滅しているのが見て取れた。

「さて、これからどうする？もう抱くなんて言わせないからな。」

「当たり前だ。私もお前も捕まるわけにはいかない。精々ががんばって私を抱えて逃げてくれよ？」

「ふん、言われずともそうするさ。」

記憶が違うとはいえ、この世界で最も信頼できる人物である事に変わりはない。

置いて行くなど言語道断、バラバラになるのもできれば避けたいところだが・・・

「とりあえず、もう少し周辺の様子を見てから人込みに紛れよう。」

「こちらがISを出さない限りわからないだろうからな。」

「その後の宛てはあるのか？」

「多少、な。まあなければつくればいい話……」

言葉を遮って爆発音と振動がビルを震わせた。

「何！？」

「このビルは完全に包囲されている。人質を解放して投降せよ。でなければビルごとお前達を叩き潰す。」

「はぁ！？」

ブリタニアでさえもやらないような方法だ。そして明らかに人質の事など考えていない。

「ISを使っても無駄だぁー！こちらには本国のISと他国からの応援もあるー。おとなしくでてこーい！」

拡声器を使っているのか？いちいち声を伸ばす奴だ。

「さて、どうするルルーシュ？」

「おとなしく投降するほどお人よしじゃない。下に降りて下水道から外に出る。出口毎に戦力をおいているのなら一箇所の戦力は少ないはずだ。」

「5分待つ。それでも応答が無い場合はビルを破壊するぅー！！」

「

5分もあれば十分だ。

「行くぞ！」

俺達は下層に向かって走り出した。

第八話 再会の使徒（後書き）

お久しぶりです、えだゆきです。

これくらいだったら大丈夫だと信じたい（汗）

さて、ISと全く関係ない方向に走っていましたがとりあえず次辺りからIS方面へいけるかと思えます。

フラグはへし折るものです、はい。

しかし、お話としてのフラグを壊すと大変な事になりますのでその辺は慎重にやっ行って行こうと思っています。

第九話 逃走劇

なあルルーシュまた来てしまったよ。

ナナリー達に見つかつてな、この教会のシスターをやる事になったんだ。

皮肉だろう？

こんな田舎の教会になんて殆ど誰も来ないのにな。

ただの税金の無駄遣いだつて最初は断つたんだが、もしお前がここに眠っていることが誰かにばれた時、お前を守る人間が必要だつて言われてな。

贅沢な、お前は。

こんな美人にずっと見守られ続けて眠るんだ。

うれしいだろう？

お前が生きていたら鼻で笑われそうだな。

「C・C、もしこの先で俺と離れ離れになるような事があつたら数日中にここに連絡を入れてくれ」

そう言つて俺は一枚の紙を手渡した。

「ここは・・・IS学園？お前、あそこの生徒だったのか？」

「いや、俺は数日中にそこへ行く。必ず連絡が付く場所として指定したまでだ。」

実際はそこしか連絡が着くような場所を知らなかったと言うのが本音だ。

「しかし、お前が都合よくいるとは限らんだろう?」

「メッセージとして誰かに伝えておけばいい。できれば織斑という教師がいるからそいつに伝えてくれ。」

あの教師ならば少なくとも3歩で忘れるような馬鹿なまねはしないはずだ。

「別にそこまで私に気を使わなくてもいいんだぞ?」

「悪いが約束があるんでな。そうはいかない。」

「約束?」

ああそうだ。向こうの世界では果せなかった約束はこちらで果してみせる。

「5分経ったあゝ! 予告どおり、ビルを破壊するうゝ!」

丁度いいタイミングである警官の濁声が聞こえてきた。

「本当に破壊するつもりなのか? あの警官は。」

「さあな。俺としては爆破してくれる方がありがたい……」

その台詞とかき消して拡声器の音が響き渡った。

「爆破ああああ！！！！」

ああそりやもう、派手な音を立ててビルは倒壊した。下水道の一部も含めてな。

「下水道は一回逃走ルートとして使ったからな。戦力があると思つて間違いない」

しかし・・・考えなかったのか？爆破予告をされては下水道に配置された戦力は深追いできないだろうに。下水道に誘い込む罠の可能性も考えたが航空戦力を相手にするよりはマシだ。慣れてもいないISで戦闘をする事はできるだけ避けたい。

「追っ手はきていない。あの頭のおめでたい指揮官に助けられたな。それにしても、その仮面はどうにかならないのか？」

今俺はシンガポールで購入した仮面と衣装を身に着けて飛んでいる。そして何故いきなりフロートユニットが現れたのかは不明。その上本来なら装着されないはずのそれがグラスゴーに付いているというなんともおかしい構図になっていた。

「顔を見せるわけにはいかないからな。それに何より使い慣れてる。」

「ルルーシュお前・・・そんな趣味があつたのか？」

「そついう意味じゃない。人はいつも仮面をかぶって生活している

という事だ」

「そういうことにしておこう」

もちろん被り慣れているのも事実だが。

それにしてもISというのは便利なものだ。モニタが空中に浮かんでいる。ロイドではないが一度分解して調べて見たい欲求に駆られた。

「一旦止まるぞ。そろそろ出口だ。」

暗く沈んでいた下水道が徐々に明るくなり外が見えた。
鳥の声や潮の香りがする事から海に繋がっているのだろう。

「熱源反応は3機。大きさに二つは車両。もう一つはISか・・・」

センサー類は向こうの世界のものを流用できるらしい。相手の動きを見る限りではこちらを感知していない。

「1機ぐらいなら何とかなるんじゃないか？」

「戦闘はできるだけ避けたいところだが・・・」

逃げられないことも無いのだろうが、何せ相手は未知の機体。スザクの前例があるのでこのような状態が軽くトラウマなのは事実だ。だからと言ってここで立ち止まっていれば援軍は増える一方だ。

「つかまっている。相手が少ないうちに突破するぞ！」

フロートユニットの出力を最大にして出口へ突っ込む。
柵？問題外だ。

派手な音をたてて柵を破壊し、俺達は海へと飛び出した。

「おいっ！お前私がいる事を忘れているだろうっ！！」

「少し静かにしているっ！！」

警察車両は追ってきていない。

海上には巡視船のようなものも見受けられたが問題は無い。

しかし、付近で待機していたISがこちらを追ってきているのだ。

「スピードはほぼ互角。しかし・・・っおっ！」

機体に衝撃が走った。

被弾したらしく、表示されているエネルギーメーターらしいものが減っている。

「くっ、人質がいてもお構いなしか！」

「なんなら私を盾にしてもいいんだぞ？」

「ふざけるな！！お前はまた俺のために死ぬ気かっ！！」

「また？」

「・・・っ」

しまったと思った刹那、今度はフロートユニットに被弾した。
その衝撃でC・C・Cが投げ出されてしまった。

「C・C・っ！くっ、貴様……！」

人質を落としたと確認したようで本気でこちらを攻撃してきた。
接近戦？俺をなめるなよ？

ISは何かと都合がいい。

小さい機体の割りに高い性能、俺の見たことも無い技術。
そしてなにより操縦者がむき出しだって事だ！

「ルルーシュ・ヴィ・ブリタニアが命じるっ！お前は手を出すな！
！」

「イエス、ユア・マジエス（ry）」

丁度いい所で静止した相手をスターターに全力で垂直降下した。

「C・C・！」

上に時間を割きすぎた。

最大出力で飛んでいてもこれでは……

「また俺はあいつを殺すのか？俺の命の代わりに、あいつを……！
！」

王の力？絶対遵守？そんな力があっても人一人救えない力など必要
ない……！

その時だった。

『力が欲しいか？』

そうあの時のように誰かが語りかけてきた。

「当たり前だ。力があるなら力を寄越せ！あいつを救える力を！」

そう叫ぶといくつかのウィンドウが画面に展開され、『プロテクト
解除・・・飛翔滑走翼』

の文字が現れ、降下スピードが上昇した。

「ぐっ、しかしこれなら・・・」

間に合う！と言おうとした瞬間横から猛スピードで突っ込んできた別のISにC・C・を掻っ攫われた。

「なっ！！」

突然掻っ攫われたのには驚いたがとりあえずC・C・は助かったのか、と思ったのもつかの間。

ルルーシュは流星のようなスピードで海に突っ込んだ。

「山田先生、あのISはどうなった？」

「えーと、アメリカ軍とドイツの救援で人質の救出、犯人の撃墜はできたみたいですね。」

「ドイツだと？」

「ええ、なんでも試作機のテストも兼ねているようです。そういえば、織斑先生はドイツに一時期いつてらしたんですね。」

「あ、ああ。」

いいなー、海外いつてみたいなー。なんて言っている山田先生を尻目に私は考え事をしていた。

「（試作のISを任されるようなパイロットはラウラしかいまい。そして所属不明のISに乗っているのがルルーシュだったとすると・・・）」

「山田先生、2、3日出てきてもいいだろうか？」

「出るって・・・アメリカに行くんですか？」

「少々気になる事があってな。」

「そうですね。この前休んだといっても織斑先生働きすぎですから多分それ位の休みなら頂けると思いますよ。」

「そうか、ではここを頼む。」

「わかりました。お気をつけて」

背後でエライ水音が聞こえたが・・・大丈夫なのか？あいつは。ついでに私を空中キャッチしたこの女は先ほどから通信中だ。

「人質を本部に送り届けた後次いで犯人確保に・・・え、待機？何故ですか？スピードは私の方が・・・試作機だからと言って・・・・くつ、了解。これから帰還します。」

随分上司を相手に粘ったようだがつっぱねられたらしい。苦虫を噛み潰したような顔をして通信を切った。

「大変だな、軍隊というものは」

「フン、貴様がいなければあいつを落としていたのは私だった。」

随分な言い方だな、と内心思いつつ地平線を眺めて訊いた。

「あいつはどうなった？」

「犯人はお前を追ってきたスピードで海中に突入。現在搜索中だ。」

あれだけの水しぶきだ。相当深いところまで潜ったに違いない。しかし、あいつは生きている・・・気がした。

「これからお前は本部で取調べがあるだろう。私もお前を送り届ければ任務完了だ。」

「そうか。・・・悪いがお前の任務は完遂できない。」

そう言って手をISにのせるとそのまま海へ落下した。

第九話 逃走劇（後書き）

こんにちは、こんばんはえだゆきです。
案外速く書き上げることができました。
よかったよかった。

さて、いきなりですが少しお話の種をもらそうかと思います。
私はコードギアスにおけるルルーシュ生存説は否定してません。まあ死亡でも生存でもその後の話は個人の想像にお任せします、というスタンスが好きただけなんですけどね。結構大事なタネなのでその辺はご理解いただけると幸いです。では

追記：

次話は少々時間がかかりそうです。短編集をなんとなくかいていた
らまだそちらが終わってません。短編の方を書き上げてからの進行
になります。遅れてしまって申し訳ない。

第十話 黒き女王へクイーン

最近よくお前の夢を見るんだ。

何の脈絡もない夢。

私の言葉は当然届かない。

ただお前が私に向かって何かを語りかけているだけ。

何か安心したような、でもどこか寂しそうな顔でな。

そんな時は決まって何か抱え込んでいるんだ。

なあ、お前がそんな顔をしていたら私はどうすればいい？

死んだお前とは一生会えないというのに何もしてやれない私は…。

「っ…うつ、ここは…。」

ルルーシュが目を覚ました先は闇の中だった。

波と声が反響している事から海の近くの洞穴のような場所らしい。

波音のする方向へ歩いていくとまもなく星空が見えてきた。

「目が覚めたか。」

突然声を掛けられて少々驚いたが声の主を確認してルルーシュは安堵した。

「C.C.…」

「安心しろ。ここはお前がダイブしたところからは離れている。ついでに私をキャッチした相手も今頃海水浴だ。」

未だに頭がぼんやりしているルルーシュは直前の記憶を掘り返しながら新しい情報を咀嚼する。

「なら問題はない。このまま人に紛れてこの場から離れる。その後の事はまた途中で考えればいいだろう。」

そう言って歩き出すとポソリとC・Cが呟いた。

「ああ、お前一人だな。」

すると突然暗闇の中から巨大な手のようなものが現れルルーシュを驚づかんだ。

「ぐっ…C・C…!？」

「安心しろ。殺すなどとは言っている。後は手順通りに行くだけだ。」

C・Cが暗闇に向かってそう言っていると返事するように赤い光が点灯した。

しかし、極々弱い光のせいで本体を目視する事はできない。

「お前…」

ルルーシュの言葉を遮るように突然闇の中からはじけるような声が響いた。

「この天才東ちゃんのうさの一声っ！ゼーんぶぱーっと忘れちゃえ！」

その瞬間ルルーシュは赤い光の正体が自分と同じギアス眼である事に気づいたが、光の速さに対抗する術などなかった。

「やめろおおおおおおおっ！っ！」

「日本を発つこと数十分、ようやくアメリカの地を踏むことができたわけだが…さて、これからどうするか。ツテを使ってもいいが私的目的で頼るわけにもいくまい。とりあえず現地にい「ちーちゃああああああん!!!」…は？」

この声は…いや、あいつがこんな所に居るはずが…と思いつつ声のするほうを向くとこちらの期待を裏切るように顔面になんとも能天気な笑顔を貼り付けた束がこちらへ飛び掛つてくるところだった―

「で、何故お前がここに居る？それもわざわざ人の多いところに…」束のジャイアントスイングをあつさりとかわし手刀で反撃しながら尋ねるといつものように泣き喚いた後屈託の無い笑顔で答えた。

「いやあゝきつと来るだろうと思ってさっ」

Vサインまで決めた束に私は少々頭痛を覚えた。

一応お互い世間に顔が割れているわけで、特に束の場合は世界から追いかけられている身だ。もう少し目立たないようにはできないものかとつくづく思うのだが、当の本人はそういう点で頭の上からお花が一本生えているからタチが悪い。

こうしてこちらが頭を抱えている間にも馬鹿でかい声で子供のようににはしゃぎまわっている。

まあ逆にそんな頭だから常人では到底考え付かないようなことをぼんぼん思いつくのもかもしれないが。

「ところでちーちゃんはさ、ここに何しにきたの？」

ついさつきまではしゃいでいた訳だがこのときの束の目には真剣なまなざしが混ざっていた。

「お前も知っているだろう？数時間前に未確認のISが出現したそれで少し気になることがあつてな。撃墜されたとの報告を受けて来てみたんだが…」

「あゝあれね。残念だなあ、まだ見つかってないんだなあ。」

予想外だった。数力国が軍を派遣したと聞いている。それに一応だが各国の諜報、搜索能力は知っているつもりだ。ただ海に落ちたISを発見できないはずがない。それが可能だとすると…。

「束、お前が人を拾うとは成長したものだな。」

そう言つてやると若干苦い顔をしてしょうがないよ〜と言つてそれを認めた。

通常では到底ありえないことだ。何か変なものでも食べたんじゃないか？

束は決まった人間にしか接触したがない。

一時期は自分の興味の無い事全てに無視を貫き通していたのだ。

その分興味のあるものへの執着はすさまじく、いつだったか電話をしているといつに無く上機嫌だった束がいきなり「釣られたクマー#ビキビキ」と叫んでしばらくものすごい音が響き渡った後一方的に電話を切られたことがあったが、後から聞いてみればつまらない話だった。そのせいで住居空間が半壊したというのだからまた恐ろしい。今回もまたその類だろう。例えば、男がISを動かしたとかそんなことを考えているうちに束をチラチラと見ていたのだろう。こちらの視線に気付いたらしい。

「何々？ちーちゃんそんなにあのこのことが気になるの？ねえん」「バキッ」うー、痛いよ、酷いよお。」

「お前がろくでもないことを言うからだ。この馬鹿者が。」

……ルルーシュ、ルルーシュか。あいつは只者ではない。

仕草や姿勢から見受けられる品格。

会話から感じ取れる頭のよさ。

体からにじみ出ているオーラは相当な修羅場を乗り越えてきた人間のものだろう。

そんなあいつが真顔でエプロンをつけてキッチンに立つものだから最初は笑ってしまったが、出てくる料理はなんと文句のつけようがない。

まあ拾った当日に適当に材料をぶち込んで作ったカレーも最初はひどかったが朝には具も適度な大きさになっていて見違えるほど美味くなっていたのだから私の腕も捨てたものではない。正月休みにでも一夏に食べさせてやるとしよう。

そんなどうでもいいことを考えているうちに束は復活したらしい。

あさつての方向を向いて放心している私に言った。

「まだ…しばらくかかるかな。でも最後に決めるのは彼自身だから」
そついい終わつた途端上空から変なものが落下してきて派手な音と共に地面に突き刺さつた。

「っ…なんだこれは!？」

「もう時間だね。」

束はそう言い残してその中へと入っていつてしまった。

「おい! 待て、束っ!」

「ちーちゃんばいばい」

そつして束は再び空へと旅立つた。

「お前…墓穴を掘つたか」

私はそう言つて目の前の悲惨な現場を眺めた。

これまで確保の理由も無かつた束だが詰まらないことでまた追い掛け回されそうだな。

そして取り残された私は肩をすくめてISが墜落したらしき地点へと足を向けた。

第十話 黒き女王ヘクイーン（後書き）

はい、お久しぶりです。えだゆきです。

一ヶ月ぶりの投稿となっていました。

本当に申し訳ない。

理由としては言い訳乙となってしまうので書かないことにします（汗）

さていつだったかの記憶消さない宣言あっさり破棄です。まあ全てを消したわけではありませんが。

前回、前々回と書いてしまってから「あー失敗したなあどうすつかなあ」と悩んだ末こうなりました。

これから更新は不定期です。ついでに言つと次は二週間後ぐらいになるかもしれません。

そんなへっばですがまた読んで頂けると嬉しいです。では。

第拾巻話 フハハ。甘い、甘いぞ！

吹き上がる黒煙、燃え上がる炎。

そこには瓦礫の山が積みあがり、数時間前の立派な建造物の姿は今や見る影もない。

その姿を少し遠目から見ると、一機のISが浮遊していた。ほぼ全身がブラックに覆われており、目を凝らさなければその姿を認める事はできない。

炎に照らされて少しだけ見えた顔面は仮面で覆われていた。

「・・・作戦完了、これより帰還する。」

仮面はくぐもった声でそう言い残し、闇の中へと姿を消した。

日本某所の一室、ここで一人の女が手に持った紙を凝視して震えていた。

「私が2位・・・この私が、この私が・・・」

握られてくしゃくしゃになっている紙にはこう書かれてあった。

『入試結果——第2位セシリア・オルコット』

地球某所の一室で一人の男がいそいそと動き回っていた。
通常のアパートが贅沢に思えるほど窮屈な部屋。

目算するにその空間は約三畳。

そして、その部屋は整頓され住人の性格が分かるほど隅々まで磨かれていた。

ある物とすれば数冊の書籍とパソコン、毛布ぐらいか。

しかし、そんな数少ない品々も今は衣服類と共にバッグの中に収められていた。

「さて、準備は終わったか。後は・・・」

そう言つて部屋を出ていった。

通路は無数のコードで埋め尽くされており必然的にその上を歩くしかない。

男は極力ダメージが少ない部分を歩きつつ別室へ向かった。

やっと到着した部屋もおぞましい数のコードで埋め尽くされており、部屋の端の方に一人の女が椅子に座つて作業をしていた。

「今まで世話になった。今日でここを出る。」

そう男が声をかけたが無視しているのか聞いていないのか反応は無い。

それにももう慣れているようで男は続ける。

「もしまた問題が発生したら連絡しろ。できるだけのはずす。後、飯は適当に作つて保存してあるから適当に食べてくれ。」

そう言うと女は手元にあった紙に殴り書きをしてこちらに放り投げた。

『いない』

そう書いてあるのを見て男は苦笑し、じゃあと言って出て行った。再び一人になった女は手を止めてぼそりと感謝の言葉をこぼした。

「ありがと、ルル君・・・」

ここIS学園は女性にしか扱えないワードスーツ、ISを専門に扱っている世界でたった一つの学校で、多くの人々がISを学ぼうと世界各地から集まってくる。

とはいえ、その学園自体が日本にあるためここでの標準語は日本語だ。

中にはカタコトの日本語を話す生徒もいるが殆どが日本語を完全にマスターし、下手な日本人よりもうまく日本語を扱っている。

まあそれはどんな言葉だろうと日本語なわけで・・・いつそ分からなければ気分がいいだろうと思う時は必ずある。いや、今その状態であるというのが正しい。

俺、織斑一夏はヒステリックを起こしている英国女のありがたい罵詈雑言を半分呆れながら拝聴スルしているのである。

来月行われるISのクラス代表戦でのいざこざが原因で顔を合わせ毎に暴言が飛んでくるためもう慣れっこだが、今日は愚痴を言いにわざわざ俺の席まで来て”くださった”らしい。いつから俺はお前のサンドバッグに転身したんだ？

「~~~~~＃今まで全てにおいて1位を貫き通してきた私が勉学の面で他の方に遅れをとるなんて信じられませんか!」

そう言って机をバンバンと叩く。

どうやら昨日帰ってきた入試の結果が1位ではなかったことに憤慨しているらしい。

万年底辺にいる俺に死角はなかった。

そんな気持ちがなく伝わってしまったらしい。

怒りの矛先をこちらに変えてきたがった。

「まあ、参考書も捨てて成績も最底辺な貴方なんかには無縁の事でしたわね」

いくら寛容でフラグをへし折る事に定評がある俺も限界って物がある!

そう思っただち上がろうとしたところでチャイムが鳴ってしまった。いろいろな意味でゴングに救われたわけだ、俺は。

数日前・・・IS学園敷地内

深夜、全てが寝静まった中それは行われた。

本来誰もいないはずの教室の一室に明かりが燈り、その中で俺はペーパー試験と向き合っていた。

試験官は野暮用を済ませてくると言っただけで出て行ったが監視カメラは作動中である。

とはいえ、当の本人はさっさと解き終わり、睡眠中であるのだが。

数分後、廊下から響いてきた音を聞きつけ俺は起き上がると、さも熱心にやっていた風を装った。

「そこまで。手を止める。」

試験は時間通り終了した。秒単位の狂いさえも無い。

試験官は机の上から用紙を取り上げるとその場で採点を始め、ものの数分で採点を終わらせ息をついた。

「流石だなルルーシュ。たった一ヶ月でこの内容を完全に理解するとは・・・」

試験官がそう言って傍らに抱えていた超が付くほど分厚い本を手に取りぺらぺらとめくった。

半端な技術専門書など目ではないほどの文章量。それも中身の殆どが日本語で書かれていない。

「専門的な事は近くに先生がいましたからね。まあ残りはおまけみたいなものでしょう、織斑先生？」

「ふん、この程度の問題が解けないようでは入学する資格さえもないという事だ。次の試験はそうはいかない。覚悟しておけ。」

しかし、実際のところ千人以上の受験者で平均は30点そこそこ。合格者でも50点台は当たり前である。

その上年単位の時間をかけてきた学生に対してルルーシュは一ヶ月でこの鬼のような問題を突破したのだ。

「（覚悟・・・か）」

そう心の中で呟いてからルルーシュは静かに立ち上がった。

その後アリーナへ移動。ここで実技試験である。

こんな夜中だというのに快く了解してくれた先生がいたらしい。

ルルーシュたちがアリーナに着くとそちらの方から出迎えてくれた。

「お疲れ様です、織斑先生。それで君が今日試験を受け……る……あれ？」

どうやら男のIS操縦者という事を伝えていないらしい。

俺が非難の目を向けると織斑先生は苦笑して説明した。

「山田君の思った通りこいつは男子だ。一夏とは違った意味でイレギュラーだな。」

山田と呼ばれた先生は興味津々という感じでルルーシュを眺めた後、やっと自分のやるべき事を思い出した。

「ええええええ、えっと、今回実技試験の相手をする山田真耶です。」

「始めまして。ルルーシュ・ランペルージです。」

互いに自己紹介をすると織斑先生から試験内容が明かされた。

「試験時間は5分。試験官を戦闘不能又は5分間逃げ切れれば合格だ。ISを展開して位置に着け。」

IS……か。出会った当初は使用者のステータスがもろに反映されるために使いづらい印象だったが今は違う。

俺はギアスで命じてISを展開させた。

「ん？そのISは・・・」

俺のISを見た瞬間織斑先生の目が訝しげなものに変わった。

あたりまえだ。

これはグラスゴーではない。

いろいろと弄ってはあるが暁に近い。

あれは試作機だが輻射波動機構が付いたものも存在する。

ハンドガン、バズーカ等々。個人的に暁が一番汎用性の高いKMFだと思っている。

まあ所詮は汎用機なのだが。

「では、試験開始っ！」

その声と同時に上空から弾丸が飛んできた。

相手は機動性が高く遠距離射撃を得意とするラファール・リヴァイヴ。

追尾でもない限り相当面倒な相手だ。

残念ながらこちらの装備に追尾機能はなく絶対守護領域もない。

何度か上空に向かって発砲するがすべてかわされ、防戦一方かと思われた。

―が、数秒後アリーナに一番近い寮の生徒達が思わず飛び起きるような爆音を立てて試験は終了した。

加減を怠ったのと合わせてアリーナの一部を吹き飛ばした事で織斑先生の雷が落ちたのは秘密である。

「ふあゝあ」

いつものように自分の席でボーっとする。

筈は部活でまだ来ていないし、周りはクラスメイトとはいえまだ会って数日の女子だけ。

そしていつも小言を言いにくるセシリアは他の女子達と談笑中である。

いつになったら俺はこのクラスに溶け込めるんだ？

「第二アリーナが今日使えないって本当？」

「昨日の夜爆発があっただって。パニックになった人もいたらしいよ」

爆発・・・そういえば朝起きた時周りが騒がしかったけどそのせいか。

「あゝよかった。私、部屋変わって無かったらきつと校外に逃げ出してたよ」

「部屋変わったって・・・何かあったの？」

「ううん。突然織斑先生が来て、部屋を移ってくれなかった・・・」

一人の女生徒がそう言った時教室のドアが開き千冬姉が入ってきた。

「席に着け。HRをはじめる」

その声で全員が席に着くと少し遅れて山田先生が入ってきた。

「先生、その怪我はどうしたんですか？」

「え、えーと・・・あはは」

口ごもる山田先生のひたいには絆創膏が貼ってあった。

ドジっ娘属性がある山田先生の事だからどこで怪我をしてもおかしくないといえはおかしいか。

「そ、そんなことよりっ！皆さん、今日は新しくこのクラスで勉強する転校生を紹介します。どうぞ」

その言葉で入ってきた転校生を見て全員が哑然とした。
周りの視線など全く気にせず壇上に立つと始めてその口を開いた。

「始めまして。ルルーシュ・ランペルージです」

新しくやって来た転校生、それは正真正銘の「男」だった。

第拾巻話　フハハ。甘い、甘いぞ！（後書き）

お久しぶりでございます。えだゆきです。

二週間などなかった！（キリッ

なんとか日常が落ちてきてきましたので次はもう少し速めに・・・
投稿できると思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9383u/>

コードギアスR2.5 ~ Reincarnation Story ~

2011年10月1日22時49分発行